

メディアリテラシー（メディアに自律的に関わる能力）の視点を健康教育に取り入れる

愛知県・山名小学校 桑原朱美

健康観や性意識・人権に関わるところで、メディアと自分との関わりを考える機会を持つことは、これからの情報化社会を生きていく子ども達にとって必要不可欠ではないだろうか？個人で所属する「メディアリテラシー教育研究会」の藤川大祐氏(千葉大)からも、本校の授業実践に多くのアドバイスをいただいている。今回紹介させていただく「薬害エイズ＝砂時計の中で生きる＝」は、6年生の総合的な学習において、薬害エイズをマスコミがどう報道したかという点に着目した授業である。6年生は、2時間のエイズ学習をもとに、学芸会でミュージカル「フレンズ」(岐阜大 近藤真庸氏原案)を演じた。

授業の意図

薬害エイズの問題とそれに関わる情報や報道のあり方を通して、感染者が受けてきた偏見や差別について考え、マスコミの報道によって、人々がエイズに対してのイメージを固定していった経過や人々が報道に振り回されることの危険性について感じ取る。

授業の展開

前時で学習した血友病という病気について押さえ、その治療薬として「血液製剤がとても有効でかつ血友病の人に普通の生活をもたらした」薬であった事を説明した。続いて、1983年に、日本で報道された《同性愛者や麻薬常習、血友病の人に免疫を壊す病気がアメリカで広がっている》という記事に着目させた。この時、アメリカでは、すでに《血液製剤》がその原因として疑われており、非加熱製剤から加熱製剤の使用に切り替わっていることを年表から確認し、意見交換を行った。

次に、マスコミ各社が3つのエイズパニック事件で、エイズ患者や感染者を《弱者》ではなく《加害者》として取り上げたいきさつを年表から読み取らせた。《報道被害》《性交渉による感染》《売春》などについては教師が補足説明した。これらの事件報道を通して、エイズという



病気のイメージが人々に固定してしまい、その結果として、偏見や差別が生まれてきたことを、子ども達は年表や感染者のことばから学び取ることができた。

メディアは人々の価値観や物事へのイメージを作り上げる大きな影響力があることを理解する。メディアの力が、エイズの正しい知識普及やHIV検査の呼びかけなどに役立った

時、大きな力となることを理解する。(自分たちがミュージカルを演じること自体も、^イとしての働きがあることも含めて)

子ども達の感想

「これはおかしいんじゃないか、と言う気持ちを持たなくちゃいけない。マスコミに気持ちを左右されて本当にいいのかと思った。」「エイズパニックで、エイズになった人を大騒ぎしたり変なイメージを作ったりとても複雑だと思った。アメリカで非加熱製剤が危険といわれていた頃、日本では、安全パンフレットを配布したり、回収命令が遅れ輸入が続いた事が一番の問題だと思う。」「なんでも信じるから、マスコミの思い通りになってしまう。私がマスコミなら、状態を理解してから書きたい。」「マスコミは話題性のある特ダネばかりを追っている。がっかりした。日本人はもっと冷静に判断すべきだと思う。」など、マスコミの報道姿勢や当時の庶民がマスコミに扇動された対応についての疑問が多かった。本校では、5年生で「メディアと健康」というテーマでメディアリテラシーを取り入れている。そのため、こうした視点は、かなりできてきているように思う。しかし、この授業案については、藤川大祐氏からかなり厳しいご指摘をいただいているので、ご紹介したい。それは、「マスコミ批判、メディア批判から脱していない」という点である。メディアにふりまわされないことが重要だという問題提起に対し、「マスコミのセンセーショナルな報道に乗ってはいけないのだが、情報が少ない中で一般の人々はどうすればよかったのかということは、簡単には言えない。メディアを悪玉にしてしまうのは簡単だが、そこにとどまらないメディアリテラシー教育を模索していかなければならないのでは？」というアドバイスをいただいた。教育新語「メディアリテラシー」のおくの深さを面白さを学んだことばであった。これから先、メディアリテラシーに取り組まれる方たちのために、私の失敗をお伝えしたい。今後の課題として、自分自身のメディアリテラシーの学びをもっと深めていくとともに、健康教育を、「メディア」という子どもたちが1番身近としている側面から切りこんでいく面白さを子どもたちとともに開拓していきたいと考えている。